新潟日報　2021/03/20　朝刊

## 日報抄

南魚沼市のトミオカホワイト美術館は上越市出身の富岡惣一郎の油絵、墨絵、版画合わせて570点ほどを所蔵する。作品は先ごろ、害虫やカビの被害を防ぐため薫蒸された。再び展示された絵はこざっぱりしたように見えた▼富岡は若き日、志賀高原で「天の贈りもののような純白の大自然」と出合い、雪のとりこになった。雪を描くため、変色せず、ひび割れしない白い絵の具「トミオカホワイト」を開発した▼絵の具は冬の空にも用いられた。好んだモチーフの一つ、梢を描く時である。トミオカ美術館には26点の「梢」がある。女性のファンに人気があり、常に1点は展示するようにしているという。パンフレットの表紙も飾る▼富岡はなぜ梢に引かれたのか。40代に入って制作の拠点をニューヨークに移した時のことだ。多彩な現代美術があふれる巨大都市にも自然は息づいていた。粉雪が舞う冬の午後、木立に誘われ奥へ入った。ふと見上げると、澄んだ空を梢が突き刺していた▼「私は、この雪の中で裸で生きている樹々の生命力を、これらの梢から強烈に感じとっていた」「この冬の裸の姿、骨格をよく知っておかないと、春、夏、秋の木をつくり、描くことは出来ない」。富岡は後に熱を帯びた文章をつづった▼両手をポケットに入れ、背中を丸めて過ごした雪国の冬ももうすぐ終わる。郷土の画家に倣って、外へ出よう。木のそばまで歩いたら、視線を上げてみよう。細い線のような梢の先がふくらみ始めたかもしれない。

――2021・3・20(土)